

「福島原発事故から10年」・「先端研究設備による生命科学研究」

日時: 2021年10月25日(月) 13:00~17:00

オンライン開催 (Zoom利用) 参加費無料

参加申込は下記URLまたはQRコードから御願います。

<https://forms.gle/KP2QT1kbSEcHdbGg7>

開会挨拶 末吉 邦 (新潟大学 理事/CCRF センター長)

「CCRFの紹介」 13:05 ~ 13:30

泉川卓司 (新潟大学 CCRF 放射性同位元素部門 准教授)

古川貢 (新潟大学 CCRF 機器分析部門 准教授)

阿部優子 (新潟大学 CCRF 設備戦略企画室 事務補佐員)

講演1. 13:30 ~ 14:30 (座長 伊藤紀美子 自然科学研究科教授、放射性同位元素部門長)



山下 俊一 先生 (量子科学技術研究開発機構 放射線医学研究所 所長)

「福島原発事故から10年; その最前線から後方支援まで」

福島県では、原発事故後の復興の流れから新しい地方創生への歩みを確実に進めている。しかし、福島原発事故の危機的状況を脱した後の環境汚染は、現存被ばく状況と定義され、事故前の普段の生活環境より少し高めの被ばく線量率が懸念される。この健康リスクという視点からは、コロナ災禍後のアフターコロナ、ウィズコロナと呼ばれる状況と酷似する。そこで、この節目に原子力災害医療の課題と医療人が果たすべき役割を共考したい。

講演2. 14:40 ~ 15:10 (座長 泉川卓司 放射性同位元素部門准教授)



内藤 真 先生 (新潟大学名誉教授(医歯学総合研究科)、新潟医療センター病理部長)

「福島原発事故から10年; これまでの支援活動と未来」

新潟大学アイソトープセンターを中核とするグループは福島原発事故直後から環境汚染の実態把握のため南相馬市を中心に放射線量を測定し、線量率マップを公表してきた。放射能の低減により放射能測定活動はほぼ役割を終えたが、今後の被災地の再生・復興には教育が重要と考え、本学の各分野の教官有志が南相馬市の小中学校で授業を開始した。大震災10年の節目にこれまでの活動を振り返り、これからの支援活動のありかたを考えたい。

講演3. 15:20 ~ 16:20 (座長 古川貢 機器分析部門准教授)



金折 賢二 先生 (京都工芸繊維大学 工学科学部 物質・材料科学域 准教授)

「NMR分光法を用いた生体関連分子および高分子材料の研究」

NMRは有機合成化学の化合物同定に必要な測定機器であるが、さまざまな測定プローブ、付属機器を組み合わせると、生体関連化学、高分子化学、材料科学の広い分野の問題解決に利用することができる。講演では、共同利用のNMRを用いた、タンパク質、核酸などの動的構造の解析や、微量測定プローブを用いた光照射反応の生成物解析、高分子フィルムの固体NMR測定、さらに、高圧力 (~250 MPa) 印加状態でのNMRスペクトル測定などについて紹介したい。

講演4. 16:30 ~ 17:00 (座長 大島勇人 医歯学総合研究科教授、機器分析部門長)



高田 尚良 先生 (新潟大学 医歯学総合研究科 分子細胞病理学分野 助教)

「造血器悪性腫瘍における宿主免疫回避機構と治療標的の開発」

悪性リンパ腫に代表される造血器悪性腫瘍には近年の抗体医薬をもってしても未だ治療抵抗性の患者が存在し、これらの難治性の患者に対する治療法の開発が望まれています。私たちはこの難治性機序の一因として、腫瘍細胞が宿主免疫から回避するメカニズムに着目して研究を進めてきました。本シンポジウムではこれまでの研究成果と現在取り組んでいる治療標的の開発についてFACS機器の有用性も含めご紹介したいと思います。

閉会挨拶 竹林 浩秀 (新潟大学 医歯学総合研究科 教授/CCRF 副センター長)